＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter

[No.24　2009/9/25]

平成21年度第2回大学院学生海外派遣事業について（再掲）
後期の開講科目について
次回のオープンレクチャーについて
平成21年度第1回グローバルCOE論文賞の審査結果
「テクスト布置解釈学各論」の要約
グローバルCOE第7回国際研究集会の概要
グローバルCOE第8回国際研究集会の概要
gCOEスタッフ海外出張報告
gCOE新メンバーの紹介

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■　平成21年度第2回大学院学生海外派遣事業について（再掲）

2009年度グローバルCOE「大学院生海外派遣プログラム」の第2回募集をします。
受付期間：2009年9月28日(月)～10月5日(月)16時半
詳しくはグローバルCOEのWebページからご覧ください。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education03/

■　後期の開講科目について

後期のgCOE「テクスト布置解釈学」開講科目は下記の通りです。グローバルCOEのWebページにも掲載しています。
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education02/

各論I（水3限：128講義室）佐藤彰一特任教授
各論III（木3限：129講義室）釘貫 亨教授
各論V（火5限：127講義室）重見晋也准教授
各論VI（金4限：総合308/309）ゴーベル・ゼーン准教授
原論(集中) 松澤和宏教授（2010年1月7日・8日・9日[2～5限],1月10日[2～4限]：129講義室）

■　次回のオープンレクチャーについて

2009年10月21日（水）18:00～　名古屋国際センタービル15F　GCOEオフィス

講演者：重見晋也（文学研究科准教授　フランス文学・電子テクスト学）
題目：「もう一つのテクスト布置構造 - ポール・リクールの場合-」

■　平成21年度第1回グローバルCOE論文賞の審査結果

応募のあった論文について選考を行った結果、今回は該当者なしと決まりました。第2回gCOE論文賞の応募期間は来年2月頃の予定です。

■　「テクスト布置解釈学各論」の要約

各論IV　森際康友、長尾伸一、クレール・フォヴェルグ

- 第8講　コンディヤック論(6/4)
ゲスト講師に飯野教授を迎え、J・デリダによるコンディヤック論、とくにコンディヤックの言語観がもつ解釈学的意義について伺った。デリダにとってそれは脱構築の対象となっており、この言語観は、ちょうどウィトゲンシュタインにとってアウグスティヌスの言語観が持つのと同じような機能を果たしていることが判明した。コンディヤックが現前を常に超えるものとして記号を捉えられないでいることを、デリダは現前を機能とする記号論を徹底することによって示すのである。
- 第9講　フランスの場合(6/11)
フォヴェルグが、ディドロの意味理解・解釈論を講義した。ディドロによれば、知識獲得には直覚的方法と象徴的方法とがあり、人間には象徴的方法しか与えられていない。記号の意味理解は一見、生（なま）の感覚と記号との突き合わせのように思われるが、実は、記号化した感覚と記号との照合である。ディドロが、ライプニッツの記号論のどのような側面を引継ぎ、どの面を取り入れることができなかったかを解明しつつ、その記号論と生の感覚(sense data)を認める20世紀初頭の論理実証主義との顕著な相違を明らかにした。ここでは、現前の道具としての記号ではなく、常にすでに象徴することによって記号として成立する、との現前の哲学を一歩超える記号論が垣間見えるのである。
- 第10講　近代ドイツの場合(6/18)
森際が、ガダマーの解釈学のねらい、構造、そして意義と限界について講義した。ハイデガーの影響のもと、解釈学をテクスト解釈の技法にとどめるのではなく、主体客体の二元論的構成を超克する知識論・存在論へと発展させようとした。超越者を認めず、世界内存在が自然や作品を解釈する営みとして知識論を構成し、言語がもはや透明たるべきものではなく、解釈を要求するために、かえって他者の他者性、認識対象の超越性を承認させつつその他者やテクストの理解を可能にする媒介者として存在する、という世界観を予感させた。が、デリダも批判するように、それ

は媒介を拒絶する一面を持つ記号の特性や他者の他者性を過小評価する不徹底な理論にとどまり、シニフィエの豊潤、記号による解釈規定の恒常的未了（記号のjouissance）といった現象が、あるいは捨象され、あるいは説明できずに終わっている恐れがある。

- 第11講　法という解釈学(6/25)

森際が、法という解釈学：法学的世界観の成立と展開について講義した。

中世的世界観の崩壊とともに、その空隙を埋める自由人というアトム的人間像、そのための人造国家としての近代国民国家、その国制原理としての立憲民主制・法の支配が近代自然法思想のもとに成立する。近代国家が一元化した権力＝主権の支配メカニズムとして、市民の権利の制約と保護が行われた。これを通じて、実定法がその共同体の正義を実定化し、秩序に安定を与えた。こうして、国家には立法及び公権的解釈による司法的裁定による法定立、市民には自らの善の構想の構築と実践という自由かつ義務である責任が与えられた。ローマ法によれば、正義とは「各人に彼のものを与えんとする不断の意思」。その顰みに倣って法を定義すると、近代法とは、社会規範を通じて正義を実現しようとする不断の意思である。国家も市民も、法解釈する主体（法人格）として確立する。かくして法学的世界観が定着する。近代社会の発展は、市場の失敗を余儀なくし、その矯正原理として社会法や福祉国家の概念が導入され、他方で、法解釈は分業化され、それを職務とする専門職が成立する。現代日本では、このような状況に対する総括が要求されており、裁判員制度や法教育はそのような反省の第一歩である。

- 第12講　科学という解釈学(7/2)

長尾が、自然をテクストとし、それを記号体系に変換するという点から見た、解釈学としての科学観について講義した。

科学には、認知を目的とした社会システムであるという側面とともに、記号体系を用いて自然を読み解く解釈学としての側面がある。前者は、研究を国家が制度的に保障することで、端的には国家の科学技術の促進に繋がる。後者は、記号という人工的な言語を用いる数学、物理、化学といった記号体系の発展に繋がる。後者の科学観の下では、我々は自然を解釈の対象として捉え、解釈の手段として記号体系を用いる。そして、そこで起こる事象を記号体系に置換して、自然法則を読み解く。科学の記号体系は、第一義的には実験室での人間の行為による自然への働きかけを指示するところで「意味」を持つ。このように固有の記号体系を媒介して自然を解釈し、また記号体系を通じて自然に働きかけるという点では、魔術と科学は区別できない。錬金術や占星術を含め、魔術はミクロ・コスモスとマクロ・コスモスの照応に基づき、記号体系が自然言語に対応し、解釈と自然への働きかけを認めるのに対して、科学は自然言語と記号体系との関係を否定するところに違いがある。ニュートン的な科学では、さらに記号体系が視覚表象に対応する点で、なんらかの形で人間的な意味と関係を持っていたが、それは現代物理学が示すように、記号体系として科学が成り立つためには必ずしも必要なことではない。

- 第13講　経済という解釈学(7/9)

自然の解釈学としての科学から経済学が成立する。
19世紀：自然の記号体系による読解を視覚表象によって解釈するという古典的な科学、とりわけ自然を粒子の運動モデルとして捉えるニュートン主義的科学観は、人間の経済活動の解釈としての経済学に形成に援用された。19世紀後半から20世紀にいたる主流派経済学は、ニュートン力学の、空間の中を運動する粒子の運動モデルを、人間の経済活動モデルへと置換し、経済を粒子のような個人の合理的な選択に基づく相互作用の総計として描こうとした。このような社会の解釈は、20世紀後半から現在にいたるまで、政治的、社会的言説の中心となっていた。しかしニュートン的な、精密な経験科学と、主流派経済学は、体系を構成する方法の点で大きく異なる。ニュートンが『光学』で主張した「分析と総合の方法」は、体系の出発点となる命題を帰納によって導くことが要請される。しかし経済学では、出発点は自明性や論理整合性によって与えられる。主流派経済学は、数学でありながら経験的な世界に妥当するとされていたユークリッド幾何学に近いともいえる。
- 第14講　総括(7/16)
受講生から何を学んだかを聴取した。それを踏まえて、長尾、フォヴェルグ、森際が、それぞれの分担部分をまとめるとともに、講義の総括を行った。
長尾は、科学と経済認識の相関を問題とした。1980年代以降の科学哲学では、科学の対象の実在性を問題にする実在論が復活した一方で、科学を社会現象としてとらえる科学社会学が発展した。経済学は社会現象を経済として解釈する原語を提供し、それは最近まで支配的な政治言説となっていた。だが経済学は科学化への強い衝動を持つとともに、その背後の社会のニーズによって内容自体が再編されていく点で社会科学である。この事実は、昨年からの経済危機に由来する政策転換が、今後の経済に与える影響にも関わる。各国は、環境対策への財政支出に舵を切りつつあるが、それが定着すれば国家の政策体系の再編につながり、ひいては社会科学全体の再編にもつながっていく。
フォヴェルグは、テクスト以前の解釈学、およびテクストにおけるシンボルの扱いを中心にまとめた。ガダマーの解釈とは、体の記憶の中にあるあらゆる概念、「予見概念」を解釈することであった。プラトーンの時代の『パイドロス』を例に、口頭の言葉こそテクストよりも価値のあるものであり、対話を通した言葉による思想の伝達こそ、真実に到達する方法だと考えられていたことを示し、フォヴェルグはそれが“discours”であると説明した。また、ディドロの百科全書に関して、それまで細切れだった知識を継続・連続させることで知識の類似性を生み出し、新しい知識が生まれる可能性を提示した。
森際は、ガダマーの解釈学のねらい、構造、そして意義と限界をおさらいした。また、法学的世界観の成立と展開を、法学による世界解釈の運動として読み直し、語った。　内容は、第10講、11講を参照されたい。
最後に、森際が講義全体の総括を行った。テクスト解釈はholisticな営みであり、常に世界解釈へと向かう。解釈学的な態度での世界理解は、近代哲学の主客二元論を克服しうる健全な態度である。そこには理性の傲慢を抑止すると同時に、理性・言

論（ロゴス）の可能性を科学・経済・法といった多様な仕方で真摯に探究する構えが見受けられる。言語的コミュニケーションの原初性、および書かれたテクストの記号としての豊穣についての自覚が、世界の豊かさと奥行きの開発、学の歓喜、理性・言論に対するこの均衡のとれた姿勢を可能にするのであろう。

■　グローバルCOE第7回国際研究集会の概要

2009年8月29日（土）、2009年9月4日（金）～9月6日（日）
『Sixth Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL 6)』
名古屋大学（文系総合館７階カンファレンスホール、野依記念学流交流館）

文学研究科グローバルCOEプログラム「テクスト布置の解釈学的研究と教育」にとって第7回の国際研究集会となる"Sixth Workshop on Altaic Formal Linguistics(WAFL6)"は、WAFL6組織委員会との共催により、8月29日と9月4日から6日の2回に分け、都合4日間にわたって開かれた。8月29日の集会は名古屋大学文系総合館7階で行われ、その前半に設けられた特別パネル「日本語文法の諸相と日本文法論」には、グローバルCOEからも釘貫亨教授・金銀珠研究員が参加して、異なる時代の日本語に於ける現象の分析と並んで日本語学の近代化に焦点を当てた研究史の総括が展開された。同日後半と、同じく名古屋大学内の野依記念学術交流館で開催された9月の3日間の集会では、60を超える応募から審査によって選ばれた21の研究発表、招聘講師による4つの講演、4組の発表者を含む言語獲得についてのパネルが行われ、統語論・意味論・音韻論等の諸分野に跨って、アルタイ諸語に見られる様々な現象について活発な議論が交わされた。特に今回の集会では、日本語・トルコ語等の個別文法の範囲を超えて、それらの対照に基づいた通言語的観点からの研究も多く見られ、また、個別言語を対象とする研究発表に於いても、他言語を専門とする参加者から積極的に質問やコメントがなされるなど、集会の趣旨にも相応しく、より包括的な理論研究へと発展しつつある様子を強く窺うことができた。4つの招聘講演では、スタンフォード大学のBeth Levin教授、イリノイ大学のJames Yoon教授、カリフォルニア大学サンタクルーズ校の伊藤順子教授・Armin Mester教授夫妻、南山大学の斎藤衛教授と、いずれも当該分野では世界的に知られる一流の講師を得ることができ、これらを聴くために遠方から駆け付けた参加者も少なくなかったと思われる。実際、アルタイ諸語の特徴的な現象を広い視野に立って論じた分析には、会場の聴衆からも大きな反応があり、非常に有意義な講演となった。また、言語獲得をテーマとしたパネルでは、南山大学の村杉恵子教授の企画・司会の下、特に関係節の習得に焦点を当てた4つの発表が行われ、アルタイ諸語の分析から人間の普遍的言語能力の一端の解明へと至る貴重な寄与がなされた。これら高い水準の内容を持つ多くの発表に恵まれたことから、一旦の延期にもかかわらず、参加者は日本内外から110名以上を数え、大きな成功を収めるに至った。会期中、集

まった多岐にわたる専門領域・広い世代の研究者の間では、発表に於ける質疑のみならず、休憩時間中のロビーや終了後の食事の席などでも盛んな議論の交換が見られ、極めて実り多い価値ある4日間となった。
（文責・前澤大樹）

■　グローバルCOE第8回国際研究集会の概要

2009年9月3日（木）～9月5日（土）
『日本語テクストの歴史的軌跡- 解釈・再コンテクスト化・布置 - 』
プラハ・カレル大学（チェコ）
コーディネーター：高橋亨（文学研究科教授）

9月3日から5日にかけて、美しい百塔の街プラハのカレル大学との共催で、「日本語テクストの歴史的軌跡 - 解釈・再コンテクスト化・布置- 」という国際研究集会を催した。15世紀半ばに設立されたカレル大学哲学部と本部、いずれも旧市街の伝統ある建物の教室を会場として、グローバルCOEの拠点リーダーである佐藤彰一教授の開会の辞をはじめ、発表者16人による研究報告と活発な討議は、楽しくもまた充実したものであった。
古代から現代までに産出された多様なテクストを素材として、「解釈と布置」を大きな議論の枠組みとしつつ、大学院生たちをまじえた内外の研究者が、自由な視点から論じた。とはいえ、質疑応答を媒介にしつつ、それらは予想以上に相互に関連したテクスト相互関連の様相を示すものとなった。
発表対象となった分野は、日本語の文法と言語学（釘貫亨・深津周太・松澤和宏）、少女マンガと現代小説（Anna KRIVANKOVA・重見晋也）、和歌とその翻訳（Tzvetana KRISTEVA・玉田沙織・Zdenka SVARCOVA）、平安朝の物語と宗教テクストを含む絵画（Martin TIRALA・高橋亨・阿部泰郎・青木慎一）、歴史と思想（古尾谷知浩・David LABUS・池内敏・石井紫郎）と多様である。それらを窮屈な理論の枠にはめることなく、その討議の過程から、自ずから「テクストの解釈と布置」また再解釈による「再コンテクスト化」の問題が浮上したといえよう。
この研究集会の名古屋大学側の窓口は高橋亨が担当し、一年以上も前からカレル大学日本学科の人々と相談の上で計画を進めた。当初は、日本語テクスト解釈の研究と教育をふまえて、異文化コンテクストによる解釈の差異という視点から討議することを考えたのだが、ありきたりの比較文化論の枠を超えるために、「テクスト布置の解釈学的研究と教育」というテーマ設定が有効だったのである。そこでは、研究方法として一般化できる理論の共通性と、日本語の構造や文化、歴史社会的な特性と関わる問題が、「ファジーな二重化」の重要性として見えてきた。
この国際研究集会の使用言語も、当初は英語と日本語として計画されたが、海外の会場で日本語のみで行われて成功したことも特筆しておきたい。

カレル大学側の窓口は、当初はヤン・シーコラ教授の担当であったが、やむを得ぬ事情で参加できなくなったため、同じ日本学科のマルチン・ティララ准教授が具体的な計画実現に努力してくださった。日本から二日目にかけつけて参加してくださったシュワルコヴァ教授をはじめ、聴衆として、また会議の運営に協力してくださった大学院生など、カレル大学の関係者に深く感謝したい。国際会議の常ながら、濃縮された新たな出逢いを今後に生かすことも大いに期待される。

■　gCOEスタッフ海外出張報告

韓国での予備調査（8月30日～9月1日）
池内敏（gCOE事業推進担当者・日本史学）

江戸時代に日朝外交の実務を担った対馬藩の藩政文書は、現在、東京・福岡・長崎の各都府県と大韓民国の各地に伝来します。これらのうち国立国会図書館には、釜山・倭館に置かれた東向寺僧が日朝外交文書を整理・記録した『両国往復書謄』なる膨大な史料群があります。ここに収録された文書と同一のものが、対馬府中で以酊庵僧によって整理・記録された『本邦朝鮮往復書』なる史料群で、東大史料編纂所と韓国国史編纂委員会に伝来します。ここで「同一の」と書きはしましたが、実は、『両国往復書謄』『本邦朝鮮往復書』それぞれに筆録された外交文書が一致するか否かは、誰も検討したことがありません。両史料群は筆録機関や担当者が異なり、とくに担当者の在任期間にズレがあるにもかかわらず、丁寧に摺り合わせた作業はまだ存在しないのです。したがって、そうした基礎作業が早急に求められているとも言えます。
一方、『両国往復書謄』『本邦朝鮮往復書』に収録されているのは、実際に両国を往来した外交文書であり、それは前近代東アジアの公用語＝漢文で書かれた文書です。いま私の関心は、そうした外交文書が出来上がる過程についての分析にあります。韓国国史編纂委員会には、『和文控』なる史料群があり、これは漢文になる前の和文での外交文書草案を収録したものです。
和文草案がどのような過程を経て漢文草案となり正式な外交文書になるのか、その間にどのような人々の間でどのような議論がなされて仕上げられてゆくのか。また、そこに先述の東向寺僧・以酊庵僧がいかに関わっていたか、そうしたことを含めて解明したいと考えています。そのために『和文控』だけでなく、その周辺史料を含めて関連する史料群を探し出しているところであり、今回の活動は、プラハでの国際研究集会へ移動する前のわずかな時間を活用して、予備調査を試みたものです。

プロヴァンス大学からの招聘教員との打合せ
重見晋也（gCOE技術統括責任者・電子テクスト学）

プラハでの国際研究集会終了後，パリのアーセナル図書館で本年度と次年度にグローバルCOEプログラムが招聘する2人のプロヴァンス大学の教員，Vincent Vives准教授とJean-Christophe Cavallin教授に会い，招聘と国際研究集会に関する打合せを行った．Vives准教授は，19世紀フランス詩が専門で，現在は詩学と哲学をテーマにニーチェの草稿研究を行っている．グローバルCOEプログラムでは，Vives准教授を2009年11月16日（月）から1週間の予定で招聘し，2回の講演会を開催する予定になっている．
Cavallin教授は19世紀フランス小説，特にシャトーブリアン研究を専門としており，これまでにもアメリカ・イタリアなどで講演をするなど，国際的に活躍している．今回の打合せでCavallin教授を次年度招聘し，グローバルCOE講演会等で講演をお願いすることとなった．
既に報告されているように，グローバルCOEが中心となって，本学文学部・文学研究科とプロヴァンス大学との間に学術交流協定が締結されている．今回の打合せでは，協定締結を記念する国際研究集会の開催についても話し合い，今後プロヴァンス大学博士課程学校言語・文芸・芸術部門主任のJean-Raymond FANLO教授とも緊密に連絡を取り合って，次年度以降の開催実現をすることを確認した．
〔編集部注：人名のフランス語のアクセント記号は省略しました〕

■　gCOE新メンバーの紹介

9月1日より内田智秀さん（仏文学）が研究教育員として新たにグローバルCOEに加わりました。グローバルCOE のWebページでも紹介する予定です。

次回のメール版NewsLetterの発行は2009年10月中旬 を予定しています。

・‥…━━…‥・
GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」
Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.24
発行：GCOE編集部
編集担当：鎌田隆行
Copyright(C) 2009 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS
・‥…━━…‥・